



⑤性別に関して公正な社会とは？「個人差は性差を超える」というタイトルで「その人らしく女であったり男であったりすること」が尊重される世の中を実現するためには？と問われたらみなさんならどう答えますか。社会を変えるためには制度・意識を変える必要がある。とすれば、人の意識よりも制度改革が先？これは共学・別学問題とも関わりながら、真のジェンダー平等を実現するために、何をすべきか、何ができるかが問われることとなります。共学化はあくまで出発点、次代を担う子供たちの視点に立って変化に対応する・できる社会を。

県議、高校現場、別学OG、元校長、義務制現場、フォーラム関係者など、様々な立場から発言

1時間ピッタリの講演内容で、15分の休憩中には7枚の質問紙が回収されました。別学が残る理由は？どんな運動が必要か？私学や国立大学での別学は？ジェンダー平等教育と進路指導の問題点は？別学のポジティブな効果は？先の衆院選で夫婦別姓に反対し家制度を大事にするところが議席を増やしたことについては？などなど。講演後の質問で毎回感じることですが、講師はどんな質問にも答えられるわけではありません。それでもその一つ一つに対し丁寧な回答をいただきました。

1時間弱の意見交換では、県議、高校現場、別学OG、元校長、義務制現場、フォーラム関係者など、様々な立場から発言してもらい、その都度関連する声を2本のマイクでつなぎながら、それぞれの意見が少しでもかみ合うよう進行しました。坂本さんは後日その様子を「会場のクロストークが大変充実していて」と表現しています。

リアル参加だからこそ実感できること

会場発言のやり取りはその場の雰囲気も含めて是非リアル参加で体感してほしいものです。LGBTQの視点から見れば、共学高校でもそれぞれの性が大事にされているとはいいたい現場の実態。50年ぶりに帰郷した別学OGからは他県意識。男女混合名簿という名称の違和感。別学で良かった体験。別学を白黒の人種問題に置き換えて初めて腑に落ちた感覚。現場の声を聴かず結論ありきの県教委の姿勢。性はグラデーションなどなど。一見かみ合いそうになく映る文字の羅列も、会場では有機的なつながりを持つような感覚がありました。



別学・共学という視点(窓)を通じてジェンダー問題の広がりを感じた

別学・共学の選択が学力次第というシステムは公教育にはそぐわないのでしょうか。それでも国立公立大学にはいまだ女子の枠組みが残っています。別学・共学のいずれを選んでも窮屈な思いをする生徒はいま。それは自らがいづれかの発達段階に応じて解決・克服すべき問題でもあります。今回扱った別学・共学という視点(窓)を通じてジェンダー問題の広がりを感じ、その一端を見直す機会が得られた集会でした。

